

大学と美術館の協働による文化事業 ー『子どものためのワークショップ 2022 夏』の実践ー

(自治体等側) 茨城県近代美術館・美術課長

今瀬佐和

(大学側) 茨城大学教育学部・准教授

片口直樹

連携先

茨城県近代美術館

プロジェクト参加者

今瀬 佐和 (茨城県近代美術館・美術課長、
担当：事業の企画・運営)

仲田 敦子 (茨城県近代美術館・主任学芸主
事、担当：事業の企画・運営)

片口 直樹 (茨城大学教育学部・准教授、担
当：事業の企画・運営)

プロジェクトの実施概要

1 プロジェクトの目的

本事業は「地域課題の解決や知の還元、地域活性化」を目指した大学と美術館の連携によるワークショップ活動の実践である。具体的には、教育学部学生（主に美術選修・社会選修）が茨城県近代美術館を舞台に地域の子どもの対象とした造形ワークショップ『子どものためのワークショップ 2022 夏』を実施する。これにより、地域の美術の教育、普及、発展に寄与するとともに、参加学生が造形活動、教育活動の喜びを再確認する機会とする。

2 連携の方法及び役割

美術館側責任者は、大学側責任者とともに事業の企画・立案を行い、実施に向けた運営を行う。また、ワークショップが円滑に行えるように、場所の設定や材料・道具の準備等を行い、活動の環境を整える。主な材料となるターポリン、ルーピースの提供のため、関連企業との調整を行う。さらに、外部への広

報を担当する。

大学側責任者は、美術館側責任者とともに本事業の具体的な活動内容の企画・立案を行う。また、ワークショップが実施可能なものとなるよう学生への指導や事前準備、事業当日の進行を担当する。他に、本事業の趣旨を広く伝達させることに努める。

3 具体的な活動計画

事業計画として当初予定していた主なスケジュールは以下の通りである。

- 5月上旬…プロジェクトの申請
- 5月中旬…事業内容の検討
- 6月初旬…事業の企画・立案
- 6月中旬…事業内容の決定
- 7月上旬…事業の広報・準備
- 8月下旬…事業の実施
- 9月上旬…事業のまとめ

4 期待される成果

本ワークショップは近年浸透しつつある「アップサイクル」の理念をテーマとしており、共催として東洋ガラス様と YOSHIDA ART 様のご協力をいただく。これら企業との連携により、実践を通して SDG s の取り組みについても広く普及させることを心掛ける。

また、コロナ禍においてあらゆるイベントが自粛を迫られる中で、直接芸術に触れる機会を提供するといった意味では、参加する子どもたちや学生にとって学びの多い貴重な機会となる。

これらのことから、事業を通して期待される主な成果は、①文化活動の一層の推進によ

る地域活性化、②子どもが芸術に触れる身近な場所の提供、③活動実施者（教育学部学生）の将来的な教育力の向上、④大学及び美術館の地域貢献、研究・教育力の伝達、の四点である。

本事業の取り組みについては美術館が発刊する機関誌やホームページ等で成果報告を発信する。大学側においても、美術選修のホームページやSNS等を活用し、広く訴求することとする。

プロジェクトの実施成果

1 活動実績

(1) ワークショップの内容と参加者

『子どものためのワークショップ 2022 夏』は、教育学部生に向けて開講している実習科目「美術館ワークショップ実習」における実践の場として設定している。長年にわたって内容を変更しつつ、大学生が主体となって活動してきたものであり、今年度の参加者は社会科選修4年生6名、美術選修3年生12名、計18名が実践者として参加した。

活動の目的の一つとして、地域の子どもたちと美術館をつなげ、より身近に美術を捉えていただくといったねらいがある。その為に、学生は3グループに分かれ、「アップサイクル」をテーマとしたプログラムを検討した。

主な材料として、東洋ガラス様より「ルーピース」（ガラスの欠片を研磨したもの）（図1）、YOSHIDA ART様より「ターボリン」（横



図1 ルーピース

断幕や懸垂幕等で使用される素材）をご提供いただいたため、これらの材料を生かした活動内容とした。他にも、美術館が保管している画材なども活用することとした。

(2) ワークショップの実際

活動は、美術館職員に多く関わっていただきながら、下記の内容で実施した。

【事業名】子どものためのワークショップ
2022 夏

【テーマ】アップサイクル×アートのちから
ーアートでSDGsー

【期間】8月26日（金）・27日（土）

【時間】午前の部 第1回 10:00～10:50
第2回 11:00～11:50
午後の部 第3回 13:30～14:20
第4回 14:30～15:20

【会場】茨城県近代美術館 講座室・会議室
（地階ワークショップ会場）

【対象】主に幼児から小学生
小学生以下は保護者同伴

【定員】1回につき先着45名程度

【活動】A「カラフルなスモールワールド」
B「じぶんだけのてのひらせかい」
C「ゆらゆらカチャカチャふうりんづくり」（参照：図2）

【備考】感染症拡大防止に最大限配慮する



図2 プログラム案内用看板

2 プロジェクトの達成状況

(1) 文化活動の推進による地域活性化

コロナ禍における文化活動の開催においては様々な制約が強いられた。感染症拡大防止に関する措置のため、参加人数や活動時間の制限はもちろんのこと、参加者との関わり方や活動内容にまで影響が及んだ。コロナ以前のように自由な活動とはならない状況であったが、実際には定員がほぼ満たされたように、多くの参加者を受け入れることができた。造形ワークショップ活動の開催を通して、地域の文化活動の活性化に寄与できたと判断する。活動の様子は茨城新聞社が発行する「茨城こども新聞」(図3)において掲載されるなど、広く地域に訴求できたものとする。



図3 茨城こども新聞(2022年11月21日)

(2) 子どもが芸術に触れる場所の提供

本事業は、主に地域の子どもたちを対象としており、多くの参加者に活動の場を提供することができた。会場を美術館内の講座室・会議室とすることで、美術館という社会教育施設をより身近に感じることはもとより、美術そのものへの親しみがわくきっかけになっていたと考える(図4)。実施時には美術館の企画展として『どっちがどっち? いわいとしお×岩井俊雄-100 かいだてのいえとメディアアートの世界-』が開催されていたが、参加した子どもたちは、造形活動と鑑賞活動を連動させて体験することができていたと推察する。これらの相乗効果により、様々な視点から「芸術」を味わうことが出来たのではな

いだろうか。



図4 活動の様子

(3) 活動実施者の将来的な教育力の向上

活動実施者は主に美術教育(美術選修)、学芸員資格(美術及び社会科選修)に係る学生である。参加した学生の多くが将来的に教職に就くということもあり、美術館という社会教育施設で実習を行えたことは大変意義深いものであった(図5・6)。活動後の反省会においては、実際に学生から様々な感想が寄せられ、造形ワークショップ活動を通して、造形活動の原点、教育活動の原点とも呼べる機会を味わえたことが推察できた。



図5 活動の様子



図6 活動の様子

また、今年度のテーマ「アップサイクル」は連携先である茨城県近代美術館から提案されたものである。「SDGs」に関するテーマということもあり、学生はグループ活動により様々な意見を交わすことができた。子どもたちに伝達する前段階として、教科の枠を超えてテーマについて検討し、共有を図っていた。これらの経験は、今後の教育活動に生かされるものと考え（図7）。



図7 活動後の学生の様子

（4） 地域貢献、研究・教育力の伝達

大学及び美術館の地域貢献を、本事業で期待する成果として挙げていたが、これは上記で述べた「（1）文化活動の推進における地域活性化」を参照されたい。加えて述べるならば、本活動を通して、地域には様々な形で「アップサイクル」に取り組んでいる企業があるということをお示しできたと考える。「SDGs」の取り組みが社会の当たり前のように感じられる中で、それについて考えるきっかけを、多方面に生み出せていれば幸いである。

研究力の伝達については、まだまだ改善の余地があると考え。本事業の実施にあたって、上記のような企業への取材や調査研究などは十分にできなかった。実際に、「アップサイクル」についての共通理解が不足していた部分も見受けられ、一部の参加者に混乱を招いたことは否めない。テーマに関する大学独自の見解を打ち出せなかったことも事実であるため、今後の課題としたい。

教育力の伝達については、大学や美術館の

HP や SNS 等で発信することができた。参加学生の様子では、回を重ねるごとに成長が見受けられ、頼もしい限りであった。ここでの経験で得たものを、今後、教育現場に還元していく中で、伝達していただいたいと考える。

3 今後の計画と課題

本事業で実施した造形ワークショップの開催は、今後も継続して実施することになっている。現時点で、次年度のテーマも「アップサイクル」になっており、今回得た経験がそのまま生かせるものと考えている。ポストコロナにおける活動として、より自由で、よりテーマ性のある活動とするため、大学と美術館との連携をより密にすることとしたい。これにより、地域や企業等、様々な連携先が生まれてくることを願っている。